

大塚亜希（平成三十年二月号）

訂正の箇所には貼られてゆく付箋 付箋まみれのわたしの身体

満員の電車はゆれて人間は孤独な液体なのかもしれない

白文をぼうつと眺め「哀」という文字に暫く立ち止まる朝

何故ということなく町の慎ましい書店に入り三回巡る

悔しさのかたまりをぐと飲み込んだみたい喉が風に掠れる

朱の布を真直ぐに裁つりビングの雨のまひるのホワイトノイズ白色雑音



●作者の言葉

以前、幸せな人はいつでも
幸せを感じているのだろうと
根拠もなく思っていました。
でも、実際に自分が幸せを感

じられるようになってみて、
幸せな人にも寂しさや辛さは
寄り添うもので、それらを他
者と共有することは難しいと
痛感するようになりました。

でも、それが共有しがたいものだからこそ、
言葉で何とか伝えたいと思い、詠わずにはい
られない衝動をもつのだとも思うのです。
このたびは、年間選者賞をいただき、望
外の喜びです。大野先生に心より感謝申し
上げます。

●選者の言葉

大塚作品には二つの特徴がある。

一つは「体性感覚」。一首目は〈付箋ま
みれのわたしの心〉と詠みそうなところを
〈身体〉としたことで、歌が読者の心へぐつ
と入っていった。二首目も揺れる満員電車
の中での〈孤独な液体〉という人間の捉え
方がうまい。五首目は〈みたいな〉を挿入
したことにより、歌に厚みが増した。

もう一つは「色」。三首目の〈白文〉は
本文だけで注釈を施さない漢文などをさ
す。〈朝〉という場面設定もうまい。六首
目の〈朱の布〉は現実の色彩だが、〈白色
雑音〉とは全ての周波数成分をほぼ同量ず
つ含む仮想的な定常雑音のこと。このよう
に朱以外は現実の色彩でないところにも独
自性がある。